

## 昭和 37 年 焼岳火山噴火に関する証言

昭和 37 年の焼岳噴火当時、上高地の徳沢ロッジに勤務されていた有馬 輝彦氏から当時の様子を伺いました。インタビューの記録については以下に記すとおりです。有馬氏には貴重なお話をいただいたことに感謝申し上げます。

聞き取り日時 令和 2 年 12 月 22 日（火）午前 10 時 30 分から

聞き取り場所 松本市安曇支所 会議室

インタビュアー 中島 梓穂（テレビ松本ケーブルビジョン）

### インタビュー

——有馬さんは、昭和 37 年、今から 58 年前の 6 月 17 日に発生した焼岳の噴火を経験なさっているようですが、当時どちらにいらっしゃったのでしょうか。

私は、その前年までは焼岳小屋にいたんですけど、（昭和）37 年の爆発した年には、徳沢ロッジに移っていたんです。それで、夜の 9 時頃か爆発の音がしたので、これは焼岳だな、と感じました。

——爆発の時は、どのような音がしたのでしょうか。

どう説明したらいいかな。山が轟くような、ものすごい音がしたんですね。徳沢というのは、上高地から 8 km も離れているものですから、直接煙が出ている様子はわからなかったんです。これはもう夜のうちに騒いでもしかたないと朝まで待ったのです。

——翌日に、見に行かれたということですか。

そうです。翌日の朝早く起きて、当時ここ（松本市安曇支所）が（安曇村）役場で本部になっていまして、上高地のホテルが出張所だったんですよね。それで、すぐにそのホテルに向かったんですよ。

それで消防団が捜索に入っていて、一人で行ってはいけないと止められたんです。だから行くわけにもいかず、昼までは我慢したんだったかな。なんとか説得して、西穂と焼岳の稜線までならいいという許可を受けて、一人で駆け上がっていったんです。

——お一人で行かれたんですか。

そう。一人で。稜線で、まだ遠いものですから、昔の焼岳小屋は。中尾峠の手前に硫黄という山があるんですが、そこまで行って、焼岳小屋を見下ろしたんです。そしたら柱が数本立っているだけ。あとは全部潰れているんです。これはダメかなあと思って、下まで降りてきたんです。下では、もう消防団が搜索を済ませた後で、ここにはいないと。そこ（当時の焼岳小屋）にいた人は、上條さんといって、二人とも上條という苗字だったんですが、主任が上條武さん、従業員が上條計利さんといって、ちょうど私と同じくらいの年だったかな。計利さんは西穂山荘まで逃げたんですよ。打撲はしたんですが、なんとか歩けたものですからね。一人で歩いてね。

——歩いて避難された、と。

搜索隊、安曇地区の、島々の地区の方に（救助されて）背負われていたところに、私は下りる途中だったんですが、稜線で行き会ったんです。少し話をしたんですよ。でも上條武さんは、どこにいったかわからなかったんですよ。次の日だったかな。武さんは中尾に下りて、中尾の人たちに助けられた、と。そういうことで一安心したんです。それで当時の様子なんですけれども、私は徳沢にいたものですから、直接噴火を見たわけではないんですけれども、これはひどいものだなあ、と思ったんです。消防団の人にも後で話を聞いたんですが、小屋も全部どかして見たけれど、二人はいなかったと。これはどうしたものかなあ、とみんなで心配したんですけれども、武さんはそういうわけで助かった、と。足は骨折して、腕もやっぱり骨折していて。右腕だったか、左だったかは覚えていないんですけれども。

二人とも、爆発の当時、これは焼岳が爆発したな、と思って、慌てて倉庫に飛び込んで、二人とも缶ジュースの入った箱を頭にかぶせていたらしいんですよ。上から（噴石が）降ってくるもんだからね。それで体中に石が当たって、武さんは抑えていた指も折られ、足もやられちゃった。そういう状態だったから、あとから聞けば、這いずって逃げたらしいんですよ。それで中尾の人たちが、下から上がってきたところを助けられた、と。小屋もね、細かく砕かれていたみたいなんです。柱が4本か、5本くらい残っていただけかな。あとは全部細かく砕かれていた。よくこういう状態の場所で生きていたな、と感じましたね。

——当時、徳沢にいらっしやったということですが、噴火の前に異変ですとか、前兆のようなものは感じましたか。

ありました。当時の焼岳小屋は、中尾峠のあたりにあり、なかなか広いところにあったんですよ。それでクマザサがたくさん生えていたんですよ。それで噴火の前、昭和36年7月くらいからだったか、クマザサが枯れ始めたんですよ。おかしいな、どうしてクマ

ザサが枯れるんだろう、とっていて。まさか噴火するなんて考えなかったものですかね。それが一番の（前兆として）感じたことですかね。あとは、（噴火前に）頂上まで登って噴火口を覗いてみたことも何回かあったんですけども、異常に感じることはなかったですね。

——植物が枯れたというのが一番の異変だった、と。

昔、古老の人たちに話を聞いたんですけども、笹というのは何十年か経つと自然に枯れるんだってね。だから、（クマザサが枯れたときも）これは寿命が来て枯れたんかな、とっていたんですよ。後から思えば、これは溶岩のせいかな、地熱が上がったせいかな、というふうに考えるようになりましたが、詳しいことはわかりません。

——（噴火の際）徳沢で大きい音を聞いたということでした。そのとき、率直にいったはどうでしたか。怖かったですか。

怖いというか、それはものすごい音でしたからね。これは焼岳だ、と。周りには噴火し得る山は焼岳しかないからね。これは必ず焼岳だな、と感じましたね。

——明るくなってから、焼岳をご覧になったかと思うんですが、そのときの様子はいかがでしたか。

想像以上だった、という感じかな。頂上付近だけじゃなくて、下からも、もうあの山全体が白くなっていたという感じですね。

——山が何も見えないという感じ。

そう。一人で登るにも不安だったんですよ。いつ再度爆発が起きるだろうか、ということですね。それで、あまり長時間小屋の近くにいることもできなかった。おっかなくて帰ることしか考えていなかったですよ。

——噴煙の高さというのは、かなりのものでしたか。

もう雲までという。

——山の高さの倍とか。

それ以上ですね。

——当時の焼岳の噴火は、様々な被害があり、けが人も出ました。それから 58 年あまり大きな噴火活動はありませんが、あらためて、有馬さんは今どのようなお気持ちでいらっしゃいますか。

大正 4 年に爆発したんですよ。その時は大正池ができて。それ以来、昭和 37 年まで噴火はなかったですかね。それから昭和 28 年には鳴動があったんです。爆発はしなかったけれども。それ以外、昭和 37 年までは静かなものだったんですよ。

焼岳は独立した山ですよ。穂高からちょっと離れて焼岳、そして中の湯まで降りて。一番近いのは上高地の集落で。岐阜県側では中尾という集落があるんですよ。ある程度距離はあるものですから、当時、あまり被害はなかったですよ。

——災害というのは、いつ起きるかわからないものですが、こういった備えをしたらよいとお考えになりますか。

広い範囲になりますから、人的、物的な備えというのは難しいかもしれないね。爆発もどのくらいの大きさになるかわかりませんからね。

昭和 37 年の爆発は夜だったものですからね。どういうふうに噴石が降ってきたかわからないんですよ。でも、噴火当時、硫黄という山から焼岳を見下ろしたとき、降ってきた石がたくさん突き刺さっていましたね。

爆発が冬だとか、人のいない時期ならいいんだけど、登山シーズンだったときに、登山者をどう誘導するか。これが一番の問題点ではないでしょうか。

——本日は、有馬さんにお話を伺いました。有馬さん、ありがとうございました。